

漁師根性とナグサミ

小舟漁師にみる老いの現実とその受けとめ方

Fishermen's Spirit and Nagusami:
Aging and Its Acceptance of Small Boat Fishermen

中野 泰

はじめに

①沿岸漁業への回帰

②漁師根性とナグサミ

おわりに

【論文要旨】

老いを対象とする民俗学は、老人の多様なイメージを明らかにしてきた。それらの試みは、老いのイメージを再構成することにより現実の高齢化社会のあり方に疑問を投げ掛けようとする観点に支えられていた。だが、研究は老いの肯定的側面に限られ、それらイメージが生み出された地域的背景や歴史的条件などは不問にされてきた。その意味で必要なのは、否定的側面をも含み込んで老いの現実を対象化することだと考えられる。

本稿は、生産者としての立場から引退し、小舟漁を営む、山口県萩市玉江浦漁師に焦点をあて、彼ら自身が老いをどのように受けとめ、その受けとめ方がいかなる価値観に支えられたものなのかを明らかにする。当地において小舟漁は、しばしばナグサミと表現される。この特徴的な表現から、彼らが、遊びと生活の双方の間において魚を獲ることに意義を見出していることが導かれる。とりわけ、それは漁獲の多さに体现される「漁師根性」を保つ場であることに意味があった。この理由を、小舟漁の動機と、漁村の階層に規定された価値体系との関わりから分析し、漁獲高の多さを希求する社会的評価の重要性が明らかとなった。老いに伴い、漁獲と評価の低下は避けられないが、玉江浦のナグサミは、その心身の乖離の過程を間接的に受け止めていく婉曲表現として重要な役割を果たすものであったと位置づけることができる。

遠洋漁業の廃絶とともに漁師達は沿岸漁業へ回帰しつつある。歴史的展開から見ると、ナグサミに示される老いの受けとめ方や、それを支える価値観は、第一に遠洋漁業の展開に沿った産物であること、そして、それを保つこと自体、沿岸へ回帰することによる漁法の集約化や、漁業権漁場などの漁業環境の低下により、厳しくなっている現状であると指摘できる。

キーワード：年齢階梯制、高齢化社会、老い、ナグサミ、漁師根性